

# 日本初「クローン検定」で種雄牛を選抜



～ クローン検定で選抜期間を3年半に半減 ～

研究期間 | 平成13～20年度[県費研究(開発研究)]

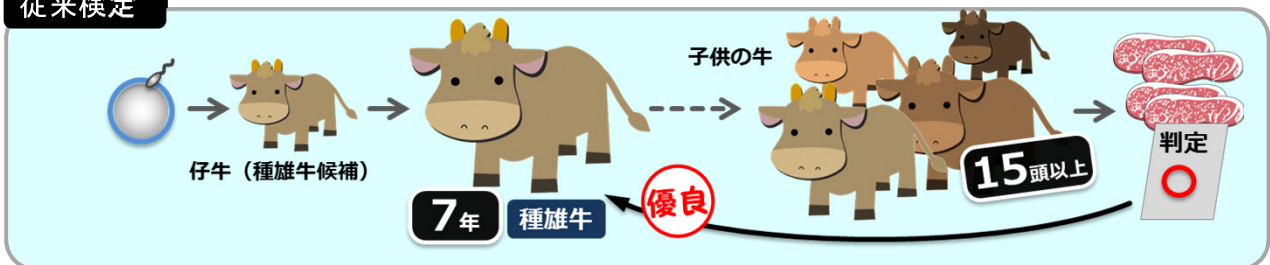
## 研究開発のきっかけ

- ◆ 肉質(霜降り)・肉量の優れた肉牛の生産には、優良な種雄牛が必要です。
- ◆ 優良な種雄牛を選抜するには、種雄牛の子供の牛を肥育して、その肉質・肉量の成績で種雄牛を評価します。正確な評価には15頭以上の子供の牛が必要で、選抜まで7年間に要していました。
- ◆ そのため正確かつ短期間で可能な選抜手法が必要でした。

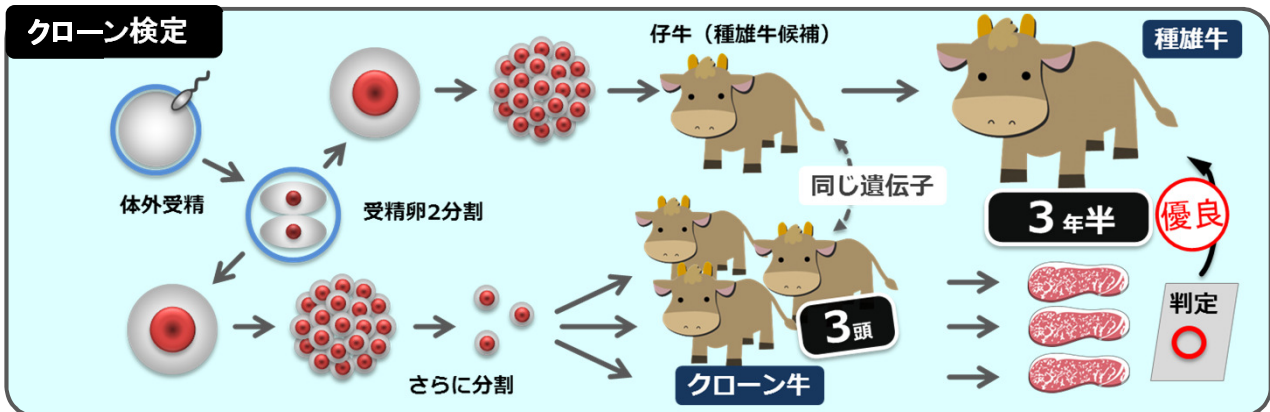
## 研究成果の概要

- ◆ 平成20年、種雄牛の受精卵からクローン牛を複数作って肥育し、その肉質や肉量の成績により3年半で種雄牛を評価・選抜する「クローン検定」を開発しました。
- ◆ クローン牛は種雄牛と同じ遺伝子を持つため、少ない肥育牛頭数でも正確な評価ができます。
- ◆ この技術で平成20～25年に5頭の種雄牛候補が誕生し、既に4頭を評価しました。
- ◆ このうち1頭を優良と判定し、平成24年に種雄牛「紅勝白(べにかつしら)」として選抜しました。

### 従来検定



### クローン検定



## 研究成果の活用状況

- ◆ 現在、県内農家で「紅勝白」の子牛が良好に発育しています。
- ◆ 平成28年頃には、この技術による良質な牛肉が食卓に届けられます。